

厚生労働科学研究委託費
 (障害者対策総合研究事業 (障害者対策総合研究開発事業 (身体・知的等障害分野)))
 総合研究報告書

「腎臓機能障害者に対する安全で効果的な腹膜透析法の開発等に関する研究」

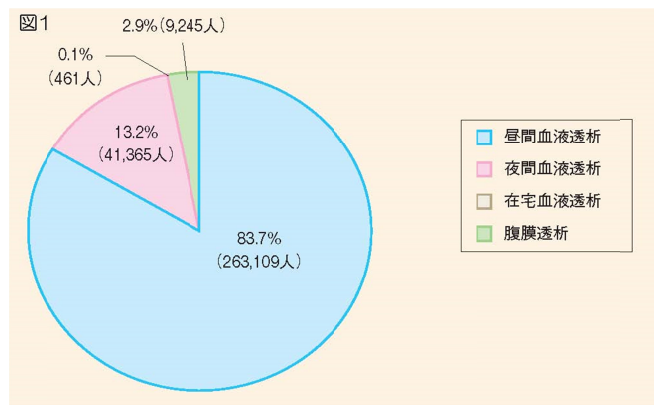
研究代表者	猪阪 善隆	大阪大学大学院医学系研究科・老年・腎臓内科学
研究分担者	松尾 清一	名古屋大学大学院医学系研究科・腎臓内科学
研究分担者	新田 孝作	東京女子医科大学・第四内科学分野
研究分担者	伊藤 恭彦	名古屋大学大学院医学系研究科・腎不全総合治療学寄附講座
研究分担者	中元 秀友	埼玉医科大学・総合診療内科
研究分担者	杉山 斉	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科慢性腎臓病対策 腎不全治療学
研究分担者	鶴屋 和彦	九州大学大学院包括的腎不全治療学・腎臓内科学
研究分担者	中山 昌明	福島県立医科大学・腎臓高血圧・糖尿病内分泌代謝内科学講座

【要旨】

慢性透析患者のうち腹膜透析(PD)患者は2.9%に過ぎない。そこで本研究では、腎代替療法を選択するうえで、PD療法をより推進するための方策を探ることを第一の目的とした。高齢者の在宅医療を推進するために、在宅療養支援所、訪問看護師、介護士を含めた多職種によるサポート体制作りを進めた。また、高齢者のPD療法導入にあたりより安全にかつ能率的に行える患者教育用補助ツール、パンフレットを作成し、今後は全国の施設で使用できるように利便を図る。施設間で連携してPD・血液透析(HD)併用療法を行う管理連携パスの使用の有効性も検証するためにアンケート調査を行い、有効性が確認できており、今後も引き続き効果を検討する。さらに、日本透析医学会統計調査委員会によるPDレジストリや大学病院などを中心としたPDレジストリにより、PD患者の実態把握や予後に関与する因子のエビデンスを確立するとともに、中性透析液を用いた透析液による効果を検討した。

A. 研究目的

血液透析(HD)は週3回通院して行われることが多いうえ、長期入院が余儀なくされる。高齢HD患者では認知症が進行することも少なくない。一方、腹膜透析(PD)は通院回数の減少、緩徐な透析療法など、高齢腎不全患者の在宅医療を推進するうえでもメリットが多い。しかし、我が国においては、慢性透析患者のうちPD患者は2.9%に過ぎない(図1)。



PDが十分普及していない理由として、PDに関する十分かつ正確な情報が患者に伝えられていないのみならず、医師やスタッフ、学生の教育の機会が不足している状況があげられる。本研究で

は、日本透析医学会や日本腎臓学会との連携し、透析医療や保存期腎不全医療に携わる医療機関や腎代替療法受診患者などのアンケート調査をもとに、腎代替療法を選択するうえで、PD療法をより推進するための方策を探ることを第一の目的としている(図2)。

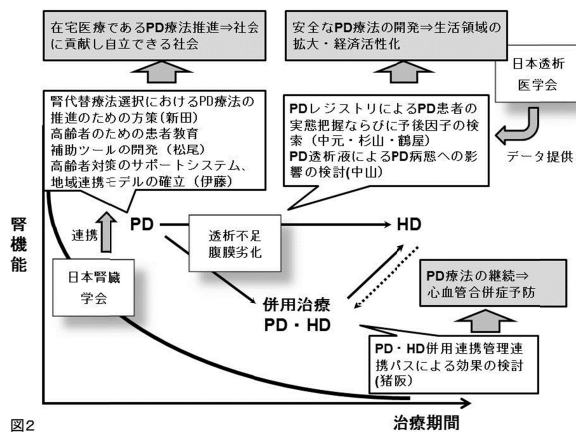


図2

一方、独居、老老介護の高齢腎不全者も多く、在宅でPD治療を進めることがしばしば困難となることがある。そこで、高齢者の在宅医療を推進するうえで、高齢者にも扱いやすい患者教育補助ツールを開発するとともに、高齢者対策のサポートシステム、地域連携モデルを確立する。

さらに、残存腎機能の低下などに伴い、週6日のPDと週1回のHDを併用する必要があるが、2014年の診療報酬改定により、少なからず腹膜透析患者に不利益が生じていることが日本透析医学会の調査により明らかとなっている(図3: 透析会誌 47:483~486, 2014)。

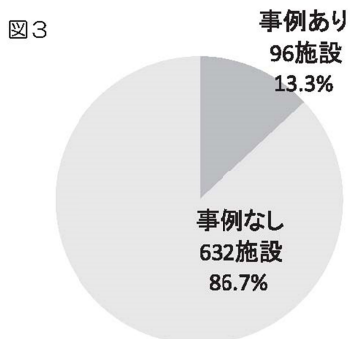


図3

そこで、本研究では2施設間で連携して治療を行う場合のPD・HD併用療法管理連携パスの使用が患者の体液管理など全身状態を改善するか検

証する。

また、日本透析医学会統計調査委員会は2009年度よりPD患者の全数調査を開始しており、また、大学病院を中心としたPD患者レジストリも集積しつつある。日本透析医学会統計調査委員会によるPDレジストリや大学病院などを中心としたPDレジストリにより、PD患者の実態把握や予後に関する因子のエビデンスを確立することを目的としている。

PD治療の合併症である細菌性腹膜炎や被嚢性腹膜硬化症(EPS)の病態には、PD透析液の生体非適合性が関わっていることが指摘されている。本邦においては2014年に、生体適合性の向上が期待される重炭酸を用いた透析液や中性化イコデキストリン液が上市されているが、乳酸中性化透析液との比較したデータは無い。そこで、現行の各種PD透析液の中皮細胞に対する影響を比較し、生体適合性が高い安全な透析液を検討することとした。

(倫理面への配慮)

研究課題毎に当該研究機関において、必要な倫理上の手続き(倫理委員会への申請・承認)、臨床試験委員会(IRB)への申請・承認を得ることを研究開始の条件とした。

B. 研究方法

1. PD療法推進のための方策の構築および高齢者支援対策; 新田・松尾・伊藤 高齢者対策のサポートシステム、地域連携モデルの確立

名古屋大学および関連施設において、PD対応可能な訪問看護ステーション等の調査を行うとともに、PDの実施可能な介護施設、在宅療養支援所との連携、介護施設(デイケア)における通院PD等含めた、具体的な方策、有用性、モデル作りまでを検討する。

高齢者のPD導入時に安全に効率的に指導するための患者教育補助

ツールの開発

高齢導入患者を対象とした、指導を容易にする PD 療法指導関連ツールの作成とその使用経験を積み重ね、将来的に全国多施設で共有できるようにツールを構築する。

2. PD・HD併用療法における連携パスの効果の検討；猪阪

PD は在宅療法であるが、残存腎機能の低下などに伴い、週 6 日の PD 療法と週 1 回の HD 療法を併用する場合がある。この PD・HD 併用療法を行うに際して、現在まで方策やシステムの構築はなされておらず、個々で対応しているのが実情である。そこで、本研究では、PD・HD 併用療法を行っている患者さんの全人的医療を行うことを目的に、PD・HD 併用療法管理連携パスを作成使用し、効果を検証する。連携パス使用に参加した医療関係に対し、アンケートを行い、連携パス使用による透析の管理状況及び合併症等を患者毎の連携パス使用事例を集計、分析、評価することで連携パスを用いた予後改善効果について検討する。

3. PD患者レジストリからの予後決定因子の探索；中元・杉山・鶴屋・伊藤

2009年度よりPD患者の全数調査「PDレジストリ」が開始された。そのために日本透析医学会統計調査委員会（委員長：椿原美治）内にPDレジストリワーキンググループ（委員長：中元秀友）が組織され、第一回調査として2009年12月31日現在（1）、第二回調査として2010年12月31日現在（2）、さらに第三回調査として2011年12月31日現在（3）の本邦におけるPDの現状が調査した。

複数の国公立大で運営する多施設合同PDレジストリー（PDR-CS）における2009年から2012年までの登録症例よりデータベースを作成し、PD離脱、死亡原因を集計した。また予後解析、重回帰分析等を行い、PD継続および

生存に与える因子を解析した。

4. PD患者における安全な透析液の検討；中山

SD ラット（正常腎機能）を対象とする。現行透析液（乳酸中性化液（2.5%グルコース(G)）、乳酸酸性液（4.25%G）、乳酸・重炭酸中性化液（2.5%G）、酸性イコデキストリン液、中性化イコデキストリン液）20mL を 10 日間に亘り一日 1 回腹腔内投与する。その後、壁側腹膜組織を採取した。壁側腹膜のマッソン染色組織標本を作製し形態観察を行う。トリプシン処理にて壁側腹膜から中皮細胞を採取、フローサイトメトリーで形態観察、さらに細胞核酸抽出し各種遺伝子発現を検討する。

（倫理面への配慮）

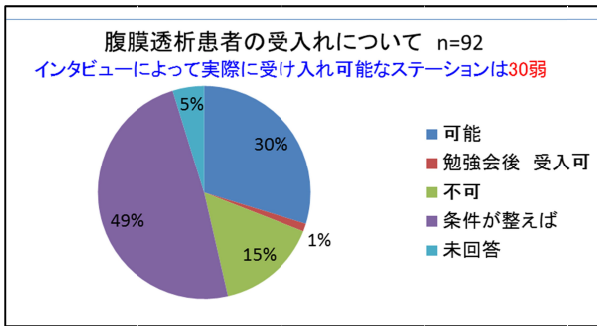
研究課題毎に当該研究機関において、必要な倫理上の手続き（倫理委員会への申請・承認）、臨床治験委員会（IRB）への申請・承認を得ることを研究開始の条件とした。

C. 研究結果

1. PD 療法推進のための方策の構築および高齢者支援対策

高齢者対策のサポートシステム、地域連携モデルの確立

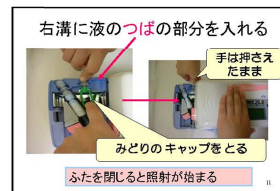
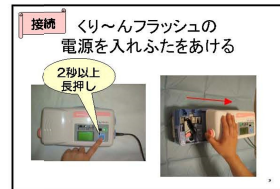
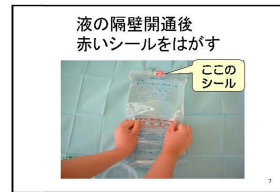
名古屋市内、愛知県下における訪問看護ステーションでPD対応可能な施設の把握の調査をホームページ、さらに電話・訪問にて調査を行ったところ、電話対応、セミナー実施時に対応可能と最終的に返答された施設は名古屋市内ではわずか23施設、市外では21施設のみであった。多くが、経験不足、人員不足との回答であり、PD対応可能な訪問看護ステーションをさらに育成することが必要であり、教育の重要性が明らかとなった。



PDを実施可能であり看護師の支援を受けられることができる介護施設を紹介するとともに、在宅療養支援所との連携、介護施設（デイケア）における新たなPD通院実施施設の設置等進めてより在宅で高齢腎不全患者がPDを行っていくことができる環境づくりを構築する試みを継続している。

高齢者のPD 導入時に安全に効果的に指導するための患者教育補助ツールの開発

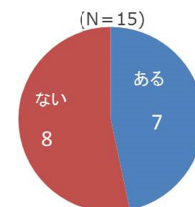
UVフラッシュオートを用いた接続システムを確実に操作できるような教育ツールを作成した。具体的には、1操作1ページとし、操作表を見ながら接続を実施することで高齢者のバック交換が可能となっている。すでに使用によって導入可能になった症例を経験している。今後、使用を重ね改良を加え、ホームページに公開する予定である。



2. PD・HD 併用療法における連携パスの効果の検討

PD・HD 併用療法を行っている PD 患者を対象とした PD・HD 併用療法管理連携パスを作成使用し、その効果を検証するための臨床研究を行った。透析施設のスタッフの 2/3 は PD 患者に対する経験はなかったが、PD に対する興味は多くが持っていた。しかし、経験や知識不足から患者への対応で困った経験を持つことが多く、患者指導でも自信を持って行えていない現状が明らかとなった。

PD患者さんへの対応で困ったことがありますか



しかし、連携パスを使用することにより、患者の状態が把握しやすい、患者の指導に役立つとの意見がみられた。また、併用パスの効用として、経時的な患者の状態がわかりやすい点や各々の医

療機関での治療方針が確認できる点が挙げられており、全員が継続したパスの使用を希望していた。

3. PD 患者レジストリからの予後決定因子の探索

本邦 PD 患者の現状と推移（2009 年 12 月 31 日現在から 2011 年 12 月 31 日現在） PD レジストリの第一回報告では 2009 年 12 月 31 日現在の本邦の透析患者数は 290661 人、そのうち HD 患者数は 280803 人（96.6%）、一方 PD 患者数は 9858 人（3.4%）であった。2008 年末のわが国の透析人口は 283421 人、PD 患者数は 9300 人だったので、透析人口は 7240 人、PD 患者数は 558 人増加している。また 2009 年度内に HD 単独・カテありの患者（腹膜洗浄の患者、原則この患者は HD 施行とみなす）は 437 人、年内に PD 導入されたものの脱落した患者数は 196 人であり、これらの患者総数は 633 名であった。これらの患者数は以前の調査であれば PD には属さない患者であるが、いずれも PD 関連患者としてカウントされるべき患者である。したがって年内に腹膜カテーテルを留置していた PD 関連患者の総数は 10491 人であった。これまでの報告で HD 患者数は着実に増加しているのに対し、PD 患者数は 1997 年の 9062 人以後は横ばい状態であった。本年度の調査で 1997 年以後初めて PD 患者数が大きく増加した。しかしながら、PD レジストリの施行に伴い今回は PD 患者の実態が明らかになったため、一見増加したように見えるものの、実際の PD 患者数はほとんど変化していないと考えるべきであろう。次いで PD レジストリ第二回報告では 2010 年 12 月 31 日現在の本邦の PD 患者数が発表された。それによれば慢性透析患者数は 298252 人、そのうち HD 患者数は 288475 人（96.7%）、一方 PD 患者数は 9773 人（3.3%）であった。HD 単独・カテありの患者は 406 人、年内に PD 導入されたものの脱落した患者数は 137 人であり、これらの患者総数は 543 名であった。したがって年内に腹膜カテーテルを留置してい

た PD 関連患者の総数は 10316 人であった。2010 年にかけて HD 患者数は 7672 名増加したのに比較し PD 患者数は 85 名減少しており、PD 患者の比率は 3.4%から 3.3%に減少している。PD ガイドラインが発表された後も、PD 患者数の明確な増加は見られていないことがわかる。PD レジストリ第三回報告（2011 年 12 月 31 日現在）では、総患者数 304856 人、そのうち HD 患者数は 295214 人（96.8%）、PD 患者数は 9642 人（3.2%）、HD 単独・カテありの患者は 369 人、年内に PD 導入されたものの脱落した患者数は 175 人であり、これらの患者総数は 544 名であった。したがって年内に腹膜カテーテルを留置していた PD 関連患者の総数は 10186 人であった。2011 年にかけて HD 患者数は 6735 名増加したのに比較し PD 患者数は 131 名減少しており、PD 患者の比率は 3.3%から 3.2%にさらに減少した。

2012 年末までに 5 大学から 227 名 PD 患者がエントリーされ（平均年齢 59.1 歳、男性 67.4%、糖尿病腎症 26.0%）、59 例が離脱、15 例が死亡した。離脱原因は PD 関連腹膜炎 18.6%、溢水・透析不全ともに 16.9%、移植 13.6%であった。死因は虚血性心疾患・悪性腫瘍ともに 26.7%、突然死 20.0%であった。他の多施設レジストリと比較して PD 離脱原因・死因とも近い結果であった。

3 年予後解析で血清 β 2-マイクログロブリン (β 2MG) 30mg/L 未満群では、同以上群に比較して 3 年後の生存率 ($P=0.0284$) や PD 継続率 ($P=0.0208$) は有意に良好であった。重回帰分析において残腎 KtV が最も有意な血清 β 2MG の規定因子であり（標準偏回帰係数 $\beta=-0.39897$ 、 $P<0.0001$ ）、血清 β 2MG 値の 1 mg/L 上昇による死亡のハザード比は 1.1 であった ($P=0.0123$)。

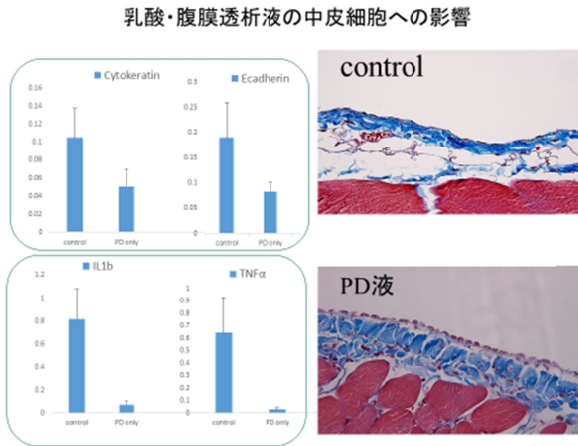
PD 患者の予後規定因子について福岡県地域の PD 患者データを用いて検討した結果、残存腎機能や心機能が継続率・生存率に関与しているだけでなく、家族構成や患者自身の ADL が PD の継続率に関与していることが示唆された。この結果より、福祉サービスの利用により PD の継続率改

善や QOL 向上が期待できると考えられる。

4. PD 患者における安全な透析液の検討

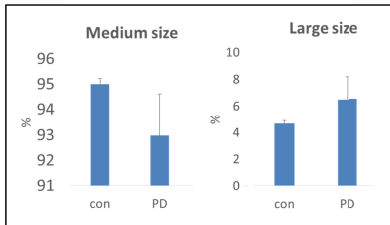
下図：腹膜組織と中皮細胞 mRNA 発現

(コントロール群と乳酸中性液群の比較)



下図：中皮細胞サイズ：フローサイトメトリーによる解析

(コントロール群と乳酸中性液群の比較)



● 腹膜中皮細胞の細胞形態変化への影響 (各 6 ~ 9 匹の平均所見を示す)

コントロール群 (無処理群) との比較 :

乳酸中性化液 : 立方化 + + , 脱落 +

乳酸酸性液 : 立方体 + + 扁平化 + 凝集 +

脱落 + +

乳酸・重炭酸中性化液 : 立方化 + / - 脱落 + / -

酸性イコデキストリン液 : 立方化 + / - 脱落 +

中性化イコデキストリン液 : 立方化 + / - 脱落 +

● 回収細胞の形態フローサイトメトリー (乳酸中性液)

コントロールに比較して、乳酸中性化透析液群では、細胞面積が拡大している比率が増加する傾向

が認められた。

● 回収細胞の mRNA 発現 (乳酸中性液)

コントロールに比較して、乳酸中性液では、コラーゲン I、フィブロネクチンの発現が増強、TGF、VEGF、Snail は著変なかった。一方、サイトケラチン、E-カドヘリン、インターロイキン 1、TNF は有意に低下していた。

D. 考察

高齢者の PD を実施可能にするためには、訪問看護ステーションの育成を含め、エリアにおけるネットワークづくりが重要と考えられる。PD サポート訪問看護ステーションリスト”を作成・公表したことは高齢者の PD 選択の可能性を高めるものであり、地域包括連携に大きな役割を果たすと考えられる。マザーホスピタルとなる病院の医師、看護師を含めたスタッフの理解、受け入れも重要であり、また在宅療養支援所、訪問看護師、介護士のサポート体制は必須であり、地域の開業医にこのような腎代替療法があることを啓蒙する必要もある。

PD+HD 併用療法をする上において、透析施設スタッフの PD に対する経験不足、知識不足があり、その点が PD 患者に対応するうえにおいて、不安感などにつながっていると考えられた。しかしながら、PD に対する興味は強く、PD に関する知識を深めたいという気持ちはうかがえ、継続した関係を築くことにより、知識が深まり、不安感も解消されることが期待できる。一方、PD 患者の不安の原因にデータや情報の共有不足があり、この点に関しては PD+HD 併用連携パスを使用することにより、経時的な患者の状態が把握でき、各々の医療機関での治療方針が確認できる点など効用が確認でき、連携パスの有用性が確認できた。

PD の本邦における現状を第一回から第三回の PD レジストリ、さらに世界の PD の現状を最近の文献から報告した。本邦を含めて、米国や欧州の国々等透析のレベルが一定水準の国々では、

PD 療法自体は横ばいか減少傾向にある。その理由として PD では腹膜劣化が生じ、長期透析には向かない事、腹膜劣化に伴う EPS などの重篤な合併症への懸念がある。一方アジアを中心とする透析の開発途上の国々では、今後も PD 患者の増加は期待できる。しかしながら、その導入比率はその国の経済性と保険状況に大きく依存している。

PD 患者のアウトカムに関する多施設・広範囲の調査報告は多くないが、水野らの東海地域での調査 (CEN 2011) や中山らの被嚢性腹膜硬化症 (EPS) 全国調査である NEXT-PD からの報告 (Perit Dial Int 2014) と似通っており、本レジストリが国公立大学病院の PD 患者で構成される点を考慮しても、少なくともアウトカムに関しては特殊な集団ではなく、国内 PD 患者の現状を反映するポピュレーションであると考えられる。

既報では血清 β 2MG の上昇は PD 患者において EPS のリスクであることが報告されているほか、血液透析患者の総死亡・非心血管死、慢性腎臓病患者の心血管イベント・心血管死、高齢人口における総死亡とも関連すると報告されている。今回我々の研究においては EPS の発症は見られなかったが、年齢・性別を調整した多変量解析において血清 β 2MG 高値とその後の総死亡・腹膜透析離脱との関連が示され、PD 患者において独立した予後因子であることが示された。血清 β 2MG 上昇は、残腎機能低下との関連が多く報告されており、他にも年齢上昇や透析歴とも関連するが、小分子の腹膜クリアランスとは関連しないとも言われる。今回の我々の研究成果はこれらの既報を支持するものであり、血清 β 2MG は残腎機能を反映し尿量より優れた予後因子となる可能性が示された。

本研究は現行の PD 透析液の生体適合性を評価することを目的にしたものである。ラット腹腔内に 10 日間透析液を投与、壁側腹膜を採取し中皮細胞の形態と各種因子の発現を検討した。形態変化として、無処理のコントロール群と比較し透析

液投与群では中皮細胞の立方化が観察された。フローサイトメトリーの検討でも、乳酸透析液で細胞面積が増大する傾向が確認されたのは、この変化を反映するものと考えられた。しかし、この程度は透析液の種類によって異なり、乳酸・重炭酸透析液、イコデキストリン液では比較的軽度であった。一方、高濃度 G の乳酸酸性液では、中皮の立方化に加えて、細胞の凝集、脱落が確認され中皮障害が顕著であった。以上の結果から、乳酸、酸性、高濃度 G は中皮細胞障害に対する危険因子となることが考えられた。

E. 結論

高齢者在宅 PD 療法の望ましい姿を提言、訪問看護ステーションの連携法について実施した。患者教育用補助ツール作成することによって、高齢者でも安全に PD を導入でき、教育のレベルアップ等の波及効果が期待される。

PD+HD 併用連携パスを使用することにより、情報の共有が容易となり、薬剤の追加や調節の連絡がスムーズとなるとともに、チェックすべき事項に漏れがなくなった。

適宜、連携パスを修正していくことにより、さらに的確に情報を共有できるツールとなることが期待される。

我が国では 2009 年から PD レジストリも始まり、その実態は以前よりも正確に把握できるようになっている。今後 PD 患者の正確な生存率ならびに継続率、さらに残存腎機能の維持率も明らかにされるものと考えられる。

PD 患者の血清 β 2MG 値は PD の継続ならびに患者生存の有意な予後決定因子となり得る。血清 β 2MG (30mg/L 未満) は PD 患者の良好な予後を示す指標であり、残腎機能、特に残腎 Kt/V により最も規定される。残腎機能維持とともに血清 β 2MG 低値を維持する PD 療法が重要である。PD 離脱の原因としては腹膜炎、溢水、透析不全が多くを占め、死因は虚血性心疾患・悪性腫瘍が最多であった。

現行の標準 PD 液 (乳酸中性化透析液) では中皮細胞障害性は抑制されているが、生理的機能の保全においては課題がある。乳酸・重炭酸液や中性化イコデキストリン液がこれにどのような影響があるのかは重要な検討課題である。

F. 研究発表

論文発表

1. Yumi Sei, Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, Masaki Imai, Keiko Higashide, Claire L Harris, Fumiko Sakata, Daiki Iguchi, Michitaka Fujiwara, Yasuhiro Koderu, Shoichi Maruyama, Seiichi Matsuo, Yasuhiko Ito. Expression of membrane complement regulators, CD46, CD55 and CD59, in mesothelial cells of patients on peritoneal dialysis therapy. *Molecular Immunology* 2015 in press
2. Chieko Hamada, Kazuho Honda, Kunio Kawanishi, Hirotake Nakamoto, Yasuhiko Ito, Tsutomu Sakurada, Yudo Tanno, Toru Mizumasa, Masanobu Miyazaki, Misaki Moriishi, Masaaki Nakayama Morphological characteristics in peritoneum in patients with neutral peritoneal dialysis solution. *J Artif Organs* 2015 14 in press
3. Yasuhiko Ito, Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, Hirofumi Tamai, Takeyuki Hiramatsu, Hiroshige Ohashi, Isao Ito, Hirotake Kasuga, Masanobu Horie, Shoichi Maruyama, Yukio Yuzawa, Tatsuaki Matsubara, and Seiichi Matsuo, on behalf of the Nagoya Spiro Study Group Long-Term Effects of Spironolactone in Peritoneal Dialysis Patients *J Am Soc Nephrol* 2014 25(5):10 1094-1102
4. Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, Yasuhiko Ito Future expectations of diagnostic approaches for treating endogenous peritonitis in patients on peritoneal dialysis *Intern Med* 2014 53(6):647
5. Hangsoo Kim, Masashi Mizuno, Kazuhiro Furuhashi, Takayuki Katsuno, Takenori Ozaki, Kaoru Yasuda, Naotake Tsuboi, Waichi Sato, Yasuhiro Suzuki, Seiichi Matsuo, Yasuhiko Ito, Shoichi Maruyama. Rat adipose tissue-derived stem cells attenuate peritoneal injuries in rat zymosan-induced peritonitis accompanied by complement activation. *Cytotherapy* 2014 16(3):357-368
6. Yosuke Saka, Yasuhiko Ito, Yoshiyasu Iida, Shoichi Maruyama, Seiichi Matsuo Efficacy and safety of fluoroscopic manipulation using the alpha-replacer for peritoneal catheter malposition. *Clin Exp Nephrol* 2014 Jul 17 in press
7. Marina Asano, Makoto Mizutani, Yasuko Nagahara, Koji Inagaki, Tetsuyoshi Kariya, Daijiro Masamoto, Makoto Urai, Yukihiro Kaneko, Hideaki Ohno, Yoshitsugu Miyazaki, Masashi Mizuno, Yasuhiko Ito Successful treatment of *Cryptococcus laurentii* peritonitis in a patient on peritoneal dialysis *Internal Medicine* 2014 in press
8. Akihito Tanaka, Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, H Oshima, Fumiko Sakata, Hideaki Ishikawa, Saori Tsukushi, Yasuhiko Ito Calcified amorphous tumor in the left atrium of a patient on long-term peritoneal dialysis. *Internal Medicine*. 2014 in press
9. Makoto Yamaguchi, Tomoki Yoshioka, Taishi Yamakawa, Matsuyoshi Maeda, Hideaki

Shimizu, Yoshiro Fujita, Shoichi Maruyama,
Yasuhiko Ito, and Seiichi Matsuo
Antineutrophil cytoplasmic
antibody-associated vasculitis associated
with infectious mononucleosis due to primary
Espstein-Barr virus infection: report of three
cases Clin Kidney J 2014 Vol.7(1):45-48

10. 伊藤恭彦、鈴木聡 腎代替療法 (透析・移植)の適応と療法選択 日本医師会雑誌 143 巻 第 11 号 平成 27 (2015) 年 2 月 p2364 ~ 2369
11. 伊藤恭彦、水野正司、鈴木康弘、鬼無洋、坂田史子、寺林武、松尾清一 リンパ管新生の腹膜透析除水不全における役割について 日本透析医会雑誌 vol.29 1 : p138 ~ 143 2014
12. 腹膜透析患者の塩味覚感度に食習慣が及ぼす影響 岡本 千明, 新沢 真紀, 松本 稔子, 吉村 栄里, 中野 智香子, 山本 陵平, 長澤 康行, 北村 温美, 中西 健, 猪阪 善隆; 腎と透析 77 巻別冊 腹膜透析 379-380, 2014
13. 中井 滋、他 ; わが国の慢性透析療法の現況 (2009 年 12 月 31 日現在) 透析会誌 44 : 1-36、2011.
14. 中井 滋、他 ; わが国の慢性透析療法の現況 (2010 年 12 月 31 日現在) 透析会誌 45 : 1-47、2012.
15. 中井 滋、他 ; わが国の慢性透析療法の現況 (2011 年 12 月 31 日現在) 透析会誌 46 : 1-76、2013.

学会発表

1. Improvement of prevalence of peritoneal

dialysis(PD) therapy in end-stage renal disease(ESRD) patients from 2010 to 2012 in the Tokai area of Japan. –Five years after the previous study.- Masashi Mizuno, Yasuhiko Ito, Yasuhiro Suzuki, Yosuke Saka, Takeyuki Hiramatsu, Hirofumi Tamai, Makoto Mizutani, Tomohiko Naruse, Norimi Ohashi, Hirotake Kasuga, Hideaki Shimizu, Hisashi Kurata, Kei Kurata, Satoshi Suzuki, Shoichi Maruyama, Seiichi Matsuo The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)

2. Expression of membrane complement regulators in mesothelial cells of patients' peritoneum on peritoneal dialysis therapy Yumi Sei, Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, Masaki Imai, Keiko Higashide, Fumiko Sakata, Daiki Iguchi, Noriko Okada, Seiichi Matsuo, Yasuhiko Ito The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)
3. Vascular Endothelial Growth Factor Receptor-3 Can Be a New Target to Improve Ultrafiltration Dysfunction in Methylglyoxal-Induced Peritoneal Injury Takeshi Terabayashi, Yasuhiko Ito, Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, Hiroshi Kinashi, Fumiko Sakata, Shoichi Maruyama, Yoshifumi Takei, Seiichi Matsuo. American Society of Nephrology Kidney Week 2014 (Philadelphia,Nov11-16 2014.11.13)
4. Lymphangiogenesis develops during peritoneal fibrosis in rat peritonitis models Takeshi Terabayashi, Yasuhiko Ito, Hiroshi Kinashi, Masashi Mizuno, Yasuhiro Suzuki, Fumiko Sakata, Takako Tomita, Mitsuhiro Tawada, Yumi Sei, Daiki Iguchi, Seiichi

- Matsuo The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)
5. Successful treatment of tuberculous lymphadenopathy in a patient undergoing peritoneal dialysis Chieko Matsubara, Hirotake Kasuga, Ryo Takahashi, Keiko Kimura, Kiyohito Kawashima, Hirohisa Kawahara, Seiichi Matsuo, Yasuhiko Ito The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)
 6. Efficacy and safety of fluoroscopic manipulation using the alpha-replacer for peritoneal catheter malposition Yosuke Saka, Yoshiyasu Iida, Tomohiko Naruse, Yuzo Watanabe, Yasuhiko Ito, Shoichi Maruyama, Seiichi Matsuo The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)
 7. Analysis of factors associated with the dose of continuous erythropoietin receptor activator(C.E.R.A.)in PD patients Yasuhiro Suzuki, Masashi Mizuno, Fumiko Sakata, Hiroshi Kinashi, Shoichi Maruyama, Seiichi Matsuo, Yasuhiko Ito The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)
 8. Cryptococcus laurentii peritonitis in a peritoneal dialysis patient Marina Asano, Yasuko Nagahara, Koji Inagaki, Tetsuyoshi Kariya, Daijiro Masamoto, Makoto Mizutani, Yasuhiko Ito The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology (Tokyo May14- 17)
 9. Levels of soluble C5B-9 complex fluid may be a predictor of poor prognosis in peritonitis in peritoneal dialysis patients, especially in culture negative peritonitis Masashi Mizuno, Yasuhiko Ito, Keiko Higashide, Yumi Sei, Daiki Iguchi, Fumiko Sakata, Yasuhiro Suzuki, Isao Ito, Masanobu Horie, B Paul Morgan, Seiichi Matsuo. XXV International Complement Workshop(Rio de Janeiro, Sep14-18)
 10. Calcified amorphous tumor of the heart in a peritoneal dialysis patient. Akihito Tanaka, Masashi Mizuno, Fumiko Sakata, Yasuhiro Suzuki, Hideki Ohshima, Hideaki Ishikawa, Saori Tsukushi, Shoichi Maruyama, Seiichi Matsuo, Yasuhiko Ito. 15th Congress of the International Society for Peritoneal Dialysis(Madrid, Sep7-10 poster)
 11. Successful peritoneal dialysis treatment in three cases of end-stage renal disease with liver cirrhosis Mitsuhiro Tawada, Yasuhiro Suzuki, Isao Ito, Masashi Mizuno, Yasuhiko Ito. 15th Congress of the International Society for Peritoneal Dialysis(Madrid, Sep7-10 poster)
 12. Zinc deficiency is associated with an inadequate protein intake in peritoneal dialysis patients Yosuke Saka, Yasuhiko Ito, Yoshiyasu Iida, Tomohiko Naruse, Shoichi Maruyama, Yuzo Watanabe, Seiichi Matsuo. 15th Congress of the International Society for Peritoneal Dialysis(Madrid, Sep7-10 poster)
 13. Assisted PD をめざした名古屋地区における取り組み 伊藤恭彦 第20回日本腹膜透析医学会学術集会・総会 シンポジウム(2014.9.6~7 山形)
 14. 在宅医療・介護と連携してPD管理が可能になった高齢患者の一例 鈴木康弘、伊藤恭彦、

- 坂田史子、勝野敬之、小杉智規、佐藤和一、坪井直毅、水野正司、丸山彰一、松尾清一 第20回日本腹膜透析医学会学術集会・総会(2014.9.6~7 山形)
15. 東海地区の15施設における2010年1月から3年間の腹膜透析(PD)の調査~東海PDレジストリ2~ 水野正司、伊藤恭彦、鈴木康弘、丸山彰一、松尾清一、名大PDレジストリ 研究グループ 第20回日本腹膜透析医学会学術集会・総会(2014.9.6~7 山形)
16. Assisted PDにおける新たな試み~PDに特化したサービス設立 木村慶子、春日弘毅、河島聖仁、松原千恵子、高橋亮、川原弘久、伊藤恭彦 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
17. 東海腹膜透析(PD)レジストリ2~5年後の離脱と腹膜炎についての調査~ 水野正司、伊藤恭彦、鈴木康弘、丸山彰一、松尾清一、坂洋祐、平松武幸、玉井宏史、水谷真、成瀬友彦、大橋徳巳、春日弘毅、志水英明、倉田久嗣、倉田圭、鈴木聡、鶴田吉和、松岡哲平、堀江正宣 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
18. PDのWithdrawal/Mortalityに関するアウトカム研究~PDR-CSの結果から~ 森永裕士、杉山斉、槇野博史、伊藤恭彦、松尾清一、鶴屋和彦、吉田寿子、丸山弘樹、後藤眞、西野友哉、寺脇博之、中山昌明、中元秀友 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
19. 名大病院におけるPD患者への薬剤師の関わり 井澤理子、山田清文、鈴木康弘、水野正司、伊藤恭彦 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
20. 保存期慢性腎臓病患者および腹膜透析患者の腎性貧血治療 南学正臣、伊藤恭彦 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
21. 高齢腹膜透析患者に発症したリウマチ性多発筋痛症の2症例 天野竜彰、坂田史子、鈴木康弘、佐藤和一、坪井直毅、水野正司、丸山彰一、伊藤恭彦、松尾清一 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
22. 腹膜透析患者に縦隔リンパ節結核を発症した1例 松原千恵子、春日弘毅、河島聖仁、木村慶子、高橋亮、川原弘久、伊藤恭彦 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)
23. Soluble Vascular Endothelial Growth Factor Receptor3(sVEGFR3)によるリンパ管新生抑制は、腹膜透析の除水不全を改善する 寺林武、伊藤恭彦、鬼無洋、水野正司、鈴木康弘、坂田史子、富田貴子、清祐実、井口大旗、多和田光洋、松尾清一 第57回日本腎臓学会学術集会(2014.7.4~6 横浜)
24. 腹膜透析患者由来ヒト腹膜中皮細胞における膜補体制御因子の解析 清祐実、水野正司、井口大旗、東出慶子、鈴木康弘、今井優樹、松尾清一、伊藤恭彦 第57回日本腎臓学会学術集会(2014.7.4~6 横浜)
25. 腹膜透析患者におけるC.E.R.A.投与量に関連する因子の検討 鈴木康弘、坂田史子、勝野敬之、加藤規利、尾崎武徳、小杉智規、佐藤和一、坪井直毅、丸山彰一、水野正司、松尾清一、伊藤恭彦 第59回日本透析医学会学術集会・総会(2014.6.13~15 神戸)

26. 長期腹膜透析(PD)患者に生じた左房内 calcified amorphous tumor(CAT)の1例 田中章仁、水野正司、坂田史子、加藤規利、鈴木康弘、勝野敬之、尾崎武徳、小杉智規、坪井直毅、佐藤和一、丸山彰一、松尾清一、伊藤恭彦、大島英揮、筑紫さおり、石川英昭 第59回日本透析医学会学術集会・総会 (2014.6.13~15 神戸)
27. 腹膜透析排出液中の補体活性化産物測定により、腹膜炎の予後を予測できるか 水野正司、伊藤恭彦、東出慶子、清祐実、井口大旗、坂田史子、鈴木康弘、堀江正宣、B.Paul Morgan、松尾清一 第51回補体シンポジウム (2014.8.22~23 神戸)
28. PRESの画像所見を呈し、血漿交換と免疫抑制治療が奏功したNP-SLEの一例 伊藤一光、田中章仁、勝野敬之、加藤規利、鈴木康弘、加藤佐和子、石本卓嗣、尾崎武徳、小杉智規、安田宜成、佐藤和一、坪井直毅、水野正司、伊藤恭彦、丸山彰一、松尾清一 第44回日本腎臓学会西部学術大会 (2014.10.3~4 神戸)
29. 筋痛症状を呈し、CAPD継続が危惧されたPMRの2例 小崎陽平、鈴木康弘、坂田史子、加藤規利、勝野敬之、石本卓嗣、小杉智規、佐藤和一、坪井直毅、水野正司、丸山彰一、伊藤恭彦、松尾清一 第44回日本腎臓学会西部学術大会 (2014.10.3~4 神戸)
30. 腹膜炎発症リスク因子の検討 北村 温美、濱野 高行、高橋 篤史、中野 智香子、猪阪 善隆、椿原 美治; 第59回日本透析医学会学術集会 . 神戸 . 2014.6.12-15
31. 腹膜透析(PD)+血液透析(HD)併用療法連携パスの導入効果 北村 温美, 松本 稔子, 高橋 篤史, 齊藤 文子, 猪阪 善隆; 第59回日本透析医学会学術集会 . 神戸 . 2014.6.12-15
32. PD/HD併用療法 北村 温美, 濱野 高行, 椿原 美治; 第59回日本透析医学会学術集会 . 神戸 . 2014.6.12-15
33. PDのWithdrawal/Mortalityに関するアウトカム研究 -PDR-CSの結果から-. 森永 裕士、杉山 斉、伊藤 恭彦、鶴屋 和彦、吉田 寿子、丸山 弘樹、後藤 眞、西野 友哉、寺脇 博之、中山 昌明、中元 秀友、松尾 清一、槇野 博史; 第59回日本透析医学会学術集会 . 神戸 . 2014. 6.12-15

G. 知的財産権の出願・登録状況
なし